

コ メ ン ト 3

皇 紀 夫（京都大学教育学部 教授）

皇でございます。先程ご紹介がございましたように臨床教育学の研究をしています。臨床教育学と大学教授法の研究とはずいぶん距離があるように私も思いますし、皆さんもどのような組合わせができるのかとお思いのことでしょう。すでに、それぞれの先生方が大学教育のあり方について、いろいろな課題をご指摘になられたので、私はあまりお話することがないんですが、臨床教育の観点から大学教授法についてどういことがいえるか若干お話をしてみたいと思います。

私が臨床教育学の仕事として考えているのは、教育の日常の中で起こってくる様々な問題について、その問題がどういう意味を持っているかを解釈すること、あるいは、問題の意味を発見するための技術を開発していくことだと思っています。そうしますと、先程、梶田先生が指摘されたように、まさに大学においては、教育あるいは教授場面において様々な問題、あるいは問題群が存在しているわけで、これらの意味をどのように考えていけばいいのか、この課題に取り組む場合、やっぱり臨床教育の視点も有効ではないか、そういった感じがしております。

先程来ご指摘がありますように、大学における教授法の研究はやはり遅れている。例えば、幼稚園・小学校における教授法・教授内容の研究に比べますと大学の教授法研究は相当遅れており、大学は教授法研究後進地域あるいは、未開発地域というふうに呼んでいいのではないかと思います。これは、教育学の観点から見ればのことですが、実際的に見ても、京都大学にこういう教授法の研究所ができますと、おそらく、ここに行けばうまい教授法の技術というものが身につけられるんじゃないかという期待があることでしょうし、今までへたくそだった授業がおもしろくなり、そして、素早く学生たちが授業内容を理解することができるようになる、楽しい授業ができる、そういう期待があるんじゃないかと。この期待に応えることはひとつの研究課題であると思いますが、しかし私にはそれは余り重要でない課題であるように思えます。つまり、教育の内容や方法というようなものを小中高のように現代化していく、仮にそれを現代化モデルとしますと、これは、大学以外の教育領域ではいろいろな技術、ノウハウが蓄積されております。これをモデルとして大学の教授法を開発していく、これも一つの方法であるわけですが、しかし、そのことによって大学教育の独自性、あるいは教授法の固有性というものが失われる可能性があるんじゃないかという思いがします。

臨床教育学は、問題を発見したとき簡単に問題解決の処方作りにとびつかない、問題が物語っている意味をよく理解しようとするわけです。同じような意味で、この教授法未開発領域と呼ぶことができる大学教育には、特種な文化というものがあるんじゃないか、固有性とか独自性というものがあるんじゃないか、と。これに目をつぶって、現代化モデルで大学の教授場面を一義的に覆いつくしてしまうということに、少し慎重である方がいいのではないかと思います。この姿勢をあまり強調しますと、大学教員の居直りだ、というお叱りを受けるかもしれませんが、私は結局、現代化モデルで解決できる問題、つまりある種の方法論で解決できる限りでの問題だけが解決されて、実は多くの問題が残され、あるいは見失われていく、そういった可能性があることを忘れてはならない、と思います。もちろん、そういう現代化していくことの重要性というものは強調できるわけですが、合わせて別の観点を失ってはならないと思います。

じゃどうするかということですが、私は、さしあたっては大学における教授や学習場面をよく観察していくこと、何でもない話ですが、やっぱりそこから出発する必要があると思います。私も少し大学の先生方の授業を見せて頂いた経験があります。相当いろいろな工夫をして先生方は授業に臨んでおられるという印象を強く受けました。それは個人的なレベルでの工夫でありますけれども、言われているほど教育に対して無関心、研究一本というふうには思わなかったし、そういう印象は受けませんでした。それは例外である、というご指摘があるかもしれませんが、私は大学における教授場面を観察、分析していくというフィールドワークの仕事を、まず取り入れる必要があると思います。

その意味では、大学教授法の研究は、教育の中の一つの領域、教育誌（ペタゴグラフィ）の作業をやって、この未

開発地、後進地域といわれる、その大学の中で一体何が行われているのか、どういう教授が実際に行われているのかをよく観察する、そこから出発するのがいいと思います。その場合、どういう観点からする観察なのか、ということですが、私は、先程大西先生のご指摘にあった問題と少し関連するのですが、大学の先生は皆、研究者だと思っている、というご指摘の部分、これはいろんなコンテキストで理解していいんじゃないかと思うんです。私は、その意識、構えは大切じゃないかと思っています。大学の教授法が遅れている一つの理由は、大学の先生が研究をしていることにある、研究というのは、すでに知った既知の世界と、まだよく分からない未知の世界の境界領域に根を置くからではないか、というふうに考えます。だから、その大変難しいところに根を置きながら、研究を続けてそして教育をやろうとしている。大学の先生の中心点が難しいところにある。既知の領域と未知の領域、その境界領域というものを、住みかとしている人達が学生に対してどういうふうなことを語っているのか、これらの語りの収集と分析の仕事は先程言いました教育誌、ですね。大学独自の教育と教授の形態を観察していく一つの観点がここにあるんじゃないかと思っています。だから、未知の世界を大学の教員がどのような形で語っているか、あるいはモデル化して語っているか、教授法研究の一つの課題は、そういう教授場面における教授者の在り方、様式といいますか、スタイル、こういうものを手がかりとしながら考えていけばいいんじゃないか。その場合、とくに既知の世界と未知の世界のその双面領域にかかわっていく手法、あるいは表現形式を解明していく手がかりとして、最近の広い意味での言語哲学の研究成果を教育学に取り入れていくことができるのではないかな。

何らかの形で、創造性とか未知の世界を開くということが、どうしても大学の教授法研究ではおさえておくことが必要であると思うんですけれども、そういった課題意識といいますか、方向性をもった教授法研究がこのセンターで取り組まれることを期待したいですね。特に、このセンターが京都大学にあるということは、多様で多元的な知の世界が共存しておって、いろんな人達がいろんな知の領域で授業しているわけですから、ここはもう教授法研究の宝庫といってよいのではないかと思います。確かに大学教授法の研究は、遅れておりますし、随分いろいろな問題を持っていますけれども、しかし、この後進性の意味を現代化モデルで一挙に解体するのではなく、さまざまなコンテキストで大学教授の様式を読みとっていく地道な作業が必要ではないか、そういう思いがします。時間がきましたようですので、そういう思いでこのセンターの今後の活躍を期待しております。

その他の議論

（岡田センター長）

先程コメンテーターの大西先生の方からご質問が二つございました。一つは、教育と研究の基本的な連関の問題。それから第二には、今後センターで開発された知見や方法をどのような形で普及していくのかということ。それらにつきまして、梶田教授の方からお話していただきます。

（梶田教授）

私はあまり研究と教育というふうに分けない方がいいと思うのです。といっても、一流の研究をしていたらそれだけで十分に一流の教育ができる、と単純に言うつもりはありません。だけれども研究のことをどこかに置いておいて「大学というところでは教育が大事なんだ」と言い過ぎますと、また欧米なりどこかなりの既成のモデルなり体系なりを大学では上手に説明すればいいんだ、みたいな話になると思うんです。語弊があるかもしれませんが、現在の大学はもう幕末の蕃書取調所ではないと私はよく言うんです。ご承知のように幕末には、欧米の進んだ文物を一生懸命日本に輸入紹介した。これが高度な研究なり教育なりの具体的な中身であったと思います。しかし今はそうじゃないはずです。どこかに優れたモデルなり体系なりがあってそれを輸入紹介するということもあるかもしれないけれども、それ以上に、自分の頭をクリエイティブにはたかせ、何か新しいものを創り出すということに努めて、そこから一つの知の在り方を学生に発散させていくことによって学生自身の能力や発想を開発していく、といった新しい形での研究と教育の一体化の方法があるんじゃないかと思うのです。研究と教育をあまり分けて考えないで、やっぱり一流の研究者であり、一流の教育者であるということを、これからの大学教官の全てが目指さなければならないのではないか、ということをお願いしたい。

もう一つは、今後われわれのセンターがどういうふうにしていくかです。これは実に頭の痛いことですね。例えば京都大学に新しく採用された専任講師、助教授、教授は必ずセンターの主催する講習なり研修なりに出席すべし、ということであれば話は簡単です。しかし、現状ではこれは非常に抵抗の大きい方法だろうと思います。「こういうのがいい指導法ですよ」といっても、大学人は、だいたいそういうことにまだあまり関心がありません。しかも他人に何か言われるのが大嫌いなわけですから「ここに問題がありますよ」と言うだけで、もうそっぽをむくということになるでしょう。したがって現状では迂回策でいくしかない。一つはこういうフォーラムを毎年必ず持つということを考えております。また月例会として大学の教育活動の改善に関心のある方と一緒に、月に一度は研究会をもとうと考えております。そういうところで一緒に議論しながら輪を広げていくという迂回作戦というわけです。

これと同時に、いろいろと出版物等を通じて情報やアイデアを大学人の間に広めていかなければならないでしょう。例えば日本の各大学で今いろいろな試みがあります。日本に500も大学があるわけですから、教育改善という点でももっと相互の交流を図らねばならないでしょう。もっと言いますと、こういう大学レベルでの教育改善の試みは、アメリカでもイギリスでも、ドイツ、フランスでも今一生懸命にやっております。そうした情報についてもっと収集整理してお知らせしないといけない。われわれのセンターの情報発信機能を増大させていく中で、確かに迂回作戦ではあるでしょうが、少しずつ大学人の意識変革を図っていかなければならないだろうと考えております。

ここで草原審議官にお願いがございます。文部省でお考えいただきたい二つの大事なことがあると思うのです。一つは金です。もう一つは人です。パワーのある人が各大学で、またわれわれのセンターで、バリバリ活躍するという体制にならないとだめだろうと思います。一人でショボショボやっていたのではピエロです。したがって文部省の担当官の方々によく御理解いただき、金と人をつけていただくという形で支援してもらわないとどうにもならないな、という気持ちを強く持っております。

（井村総長）

大西先生のお話で私の名前がでましたので、一言だけ申し上げます。私は、ご承知のように医学部の出身でありま

して、医学部には「臨床」と「基礎」があります。私は、臨床医学の方をやっておりました。この臨床と基礎は時として対立します。かなり違う側面を持っています。しかし、その二つがお互いに議論し合うことによって、時としては対立しても、そういった緊張的な関係があることによって、やはり非常に良い面も出て来ると思います。したがって、どの学問分野でも私は「臨床」という要素をやっぱりやってほしいのです。ところが日本の人文、社会科学は教育学部も含めて、どちらかといえば基礎に傾いてしまいます。例えば文学部で、先程、永井先生は時代が動いているとおっしゃったのに、現代をやる人が非常に少ないですね。そういう点から考えて、やっぱりこのセンターも単にその教育法の理論をおやりになるだけではなくて、ぜひ臨床をやってほしい。だから、やはり何らかの方法で一般の教官が利用できるようなことを考えてほしいと思っております、そのために私もできるだけの援助をしたいと思っております。それから、文部省にも要望するべき点は要望する。先程申し上げましたように、第二部門ができましたので、今後は四人のメンバーとなるわけですから、少し強くなってくると思います。だんだんと大きな声で——梶田先生の声は大きいですが——更に大きな声でいろいろと学内で発言をして頂きたいと、そのように思います。

（岡田センター長）

北垣先生が第一にご指摘になりました問題は、リベラル・アーツ・エデュケーションの重要性についてでありました。この点については、どれほど強調しても足りない根本的に重要なテーマであることは、申すまでもないことと存じます。それから、アメリカの優れた大学の底力はどこから由来してくるのかという問題。まずその一つは、学生に対するアカデミックなトレーニングの厳しさ、もうひとつのポイントとしては、教える教師の側に対する苛酷なまでのインテンシブな教育評価の環境というご指摘がありました。

こういう点について、我々日本の大学教師としても絶えず自戒を持ちながら懸命に努力する必要を痛感いたします。教育と研究の関連の問題にしても、その最先端の部分になりますと微妙にからまっておりますので、梶田教授がおっしゃっていたように、本当の教育活動の最先端は、明らかに何かを生み出していくクリエイティブな学問的追求の努力と相い重なるわけでございます。そういう点で、大学教師は研究面でも教育面でも両々相俟って、真剣な努力を重ねていかざるを得ないということでもあります。

それから皇先生がお触れになったことと多少かかわって、私の方から少しご報告申し上げたいと思うのは、京大の先生方は、確かに研究熱心であります、また意外に教育熱心でもいらっしゃるということです。これは昨年の夏、全学的な規模で教育スタッフを対象に意識調査を行なったものですが、それによりますと、「授業を毎年繰り返すことで、授業法などは自然に身につくものだ」という回答が確かに80%近くございました。が、他方でしかし、自分自身の教授法に対して、「トレーニングを受ける必要がある」と肯定する回答が63%に及んでおります。そしてまた、「新たに大学の教官になろうとする人にとって教授法の習得が有益である」という回答を寄せられた方が68%。これらの数字は、肯定回答が3分の2前後ということで、多少は割り引く必要があるとしても、かなりの数値を示していると思われます。巷間よく言われますように、研究大学の教授たちは研究一辺倒で、教育には不熱心だというような単純な二分法はまかり通らぬことになるわけで、これは私が日頃から実感しているところと符合する点でございます。よく考えてみますと当り前のことで、本当に研究熱心な先生ならば、それを受け継いでくれる学生さんの教育に熱心でない先生なぞ考えられないわけであります。いま申し上げました諸点については、センターの報告書『大学教授法の研究開発のために』というお手許の冊子の中で、意識調査の詳しい結果を載せておりますので、後ほど御覧頂ければ幸いです。

梶谷敦子先生（武庫川女子大学教授）

武庫川女子大学の文学部の教授、そしてまたこの京大会館に事務所を持っております財団法人京都国際文化協会の設立メンバーで常任理事、という立場から発言させて頂きたいと思っております。私は新米教授でございまして、本職はずっと著述業でございましたので、このような教授システムが開発されましたならば、お教え頂く時には大変嬉しいと思いつながら参加させて頂いたわけでございますが、我が日本ペンクラブ会長も別の名刺を出しますと、東京芸術大学教授というようなことでございますので、そういう教授も増える昨今でございますので、どうぞよろしくとお願い申し上げます。それから、ただ大学なり、わが国の教育システムが長い間動きませんでした。私どもは京都を拠点に致し

まして、25年間、1970年から大学開放の動きを致しまして、京大会館もひとつの拠点でございます。京都大学・同志社大学・関西学院大学その他多くの先生方と共に成人教育・生涯教育の視点から成人教育に当たって参りました。そう致しますと今後は先生方のご議論に出なかったことで今後教授システム開発センターに是非お願いしたいことなのですが、学習者というのは実は成人でございます。大変生活経験の豊かな、そして高学力の学習者でございます。それらの方々においては、私語などほとんどあり得ません。そして非常に鋭い指摘も出てくるわけです。そういう学習者を対象にして教授システムの開発ということが考えられるべき時代ではないか。もしもそういうことでしたら長い間蓄積された教授に関する技術というものは若干持っておりますので、お役に立つことができるかと思ひます。

それから更に今度は永井先生にお尋ね申し上げたいんですが、私どもの財団法人京都国際文化協会では、1977年から京都大学の総長・前総長それから千宗室先生などとご一緒に力を合わせて頂きまして、外国人対象の日本語教師養成講座や、日本学エッセイコンテストなどをここで行っております。実は、国際文化会館とも大変私、個人的にマツモトシゲハル先生もよく存じ上げております。そういうようなトータルなネットワーキングが今後できないかということこれも成人教育の問題でございます。

それから、文部省にお願いしたいのでございますけれども草原さんにどうぞお耳を傾けて頂けますならば、放送大学とスクーリングは現在東京で行われていて、卒業の資格付与ということが地域に限られて限界がございますので、私ども武庫川女子大学の方にも放送大学がございます。それから京都大学の方にもあると聞いております。こちらの生涯学習時代を踏まえて資格付与のためのスクーリングのシステムあるいは、教員の方がやや若干困惑しておられるような話も聞いておりますので、そういう教授システムの開発とトータルにお考え頂けたらと思ひます。

（草原審議官）

これまでのご議論を伺っていて感じたことがありますし、またいくつかの点についてお尋ねもありましたので、それも含めて多少コメントを申し上げたいと思ひます。

まず第一に、最後のご質問、放送大学のスクーリングを東京以外の場所でも行ってほしいというご提案ですが、たしかに放送大学はいまのところ関東地域でしか視聴できないわけで、それ以外の地域においては地域学習センターを設けてビデオによる学習ができるようにしております。また、将来は放送衛星を使って全国どこでも受信できるようにしようという計画も進めております。ご指摘のあったスクーリングについては地域学習センターで受講できるようになっております。まだセンターが設置されていない県もありますが、そういうところでもいずれ設置されるはずですので、もうしばらくお待ちくださるようお願いいたします。

第二に大西先生からご質問のあった研究と教育の関わりについて、これについては先ほどから何人かの方々がすでに発言されておりますが、私は大学の教員はみな教育者であると同時に研究者でもあるという二面性をもっていると思ひます。だが、一人一人についてみると、教育の比重が重い教員もいれば、研究に重心を移した教員もいる、ということだろうと思ひます。しかも、この比重も常に固定されているものではなくて、一人の教員がある時期は主として教育に携わり、ある時期はもっぱら研究中心の生活を送るということもありうるのです。もっと柔軟にとらえるべきではないかと思ひます。学部と大学院の関係でも、教育をするのは学部で研究を行うのは大学院という単純な分けかたは現実的ではないでしょう。実際には学部でも研究が行われているし、大学院でも教育が行われているからです。特に最近大学院の機能として、研究者の養成だけでなく高度専門職業人の養成という側面が強調され、そのためのコースが拡充される傾向にありますので、大学院においても教育の要素は極めて重要になってきているといえます。

第三はシラバスについてであります。梶田先生がシラバスの重要性を強調されましたが、私もまったくその通りだと思ひます。さいわいシラバスを作成する大学が確実に増えております。しかも必ずしも一般教育の部分に限られているわけではありまして、専門教育の授業においてもシラバス作りが進んでおります。こればぜひすべての大学で実施してほしいと思うのです。大学教育の質を高めるにはいろいろな方法がありますし、しかもそれらは構造的に相互に絡み合っていますから、これさえ実施すればすべてうまくいくといった決め手はないかもしれませんが、しかしもしあるとすれば、それはシラバスだろうと思ひます。もし全国の大学がこの4月からきちんとしたシラバスを作り、それに沿って講義を始めたとすれば、それだけでも、その瞬間から日本の大学教育は格段によくなるに違いありません。群馬大学が立派なシラバスを作ったので、それをモデルに作業を進めている大学も少なくないようですが、必ず

しもひとつの分厚い冊子にしなければならないというわけではありません。それぞれの授業科目ごとに必要な情報が盛り込まれたものを作ることが重要です。さらに今後は印刷物にするだけでなくデータベース化して、だれでもコンピュータでアクセスできるようにすることを考えていくべきではないかと思っています。

第四は学生評価についてであります。梶田先生はあまりお好きじゃないとおっしゃってましたが、たしかにこの学生評価については積極派と消極派とがあって意見が分かれるようにも見えます。ですが、賛成、反対という場合、すべての論者が「学生評価」という言葉を同じイメージでとらえているとは限らないのです。ですから、学生評価という言葉で表される意味を明確にしないままにその善悪を論ずるのはどうかなという感じがします。授業の進め方について学生の意見を聞くことが授業の改善のために有益であることは明白ですから、問題は学生評価が良いか悪いかではなく、何について学生の意見をきいたらよいのか、その結果をどう活用したらよいのかであろうと思います。設問の仕方によっては学生の回答も変わってきます。アメリカの大学ではごく一般に行われていますし、日本の大学でも実施しているところがありますので、そういった経験の積み重ねを参考にしながら、それぞれの大学で取り組みたいと思います。大事なことは、繰り返しになりますが、何についての学生の反応を聞こうとしているのかということであり、それは授業の内容方法を改善するための方策の一環としてとらえるべきものだということです。

最後に本来のテーマであります教授法の改善について、小・中・高等学校の先生になる人はみな教授法を教わるのに、大学の先生だけはそのような機会がないまま教壇に立っています。かつてのように大学が一部のエリートのための時代にはそれでもよかったのかもしれませんが、大学が大衆化した今日ではいろいろな点で問題が生じてきています。先ほどご紹介があったように、京都大学の先生に対するアンケート調査でも、新人の先生の研修が有益だと考える人が多いということです。戦後間もなくのころ、MITの新任教員マニュアル「You and Your Students」が日本語にも訳されて使われたそうですが、今では見かけなくなりました。最近では産業界などから大学教員に採用される人も多いので、何らかのマニュアルのようなものを用意して新任の先生の参考にしてもらおうということは有益なことではないかと思われます。これは必ずしも教授法ではありませんが、先ほどご紹介した群馬大学では昨年から新任の教員を集めて説明会と称する二日間の研修会を実施しております。こういったことも多くの大学で試みてはいかかかと思っています。

古い権威のある先生方に教授法の重要性を理解してもらおうということは大変なことだろうと思います。実際、皇先生からも指摘がありましたように、あまり固有の専門領域の中に立ち入ってしまうと、それぞれの分野の独自性もあっていろいろな問題があるかもしれません。しかし、その場合でも、教授法を工夫することが大学教育の改善にとって重要であるという意識だけはもってもらうようにする必要があると思うのです。高校の学習内容が多様化し、また外国人留学生や社会人学生も増えているので、学生の能力関心のばらつきが極めて大きくなっていますから、それを踏まえて、大学側でも教えかたについてもっともっと工夫しなければならないなっているからです。国内の閉鎖的なシステムの中だけでもを考えている限りは、あまり危機感をもたなくてもいいのかもしれません。だが、いまでは、大学はもはや日本国内だけのものではなくて、世界のグローバルなシステムの中の一つとして位置づけられ、厳しい競争にさらされる時代になっているのです。そういう観点からしても、我々は日本の大学の現状についてもっと深刻な危機意識というものをもち必要があると思うのです。

先般の兵庫県南部大地震で危機管理のあり方が問われていますが、ある人がこういうことをいいました。「危機管理も大事だが、その前に持たなくてはいけないものは危機意識だ。平常どれだけ危機意識をもてるか、それに必要なのは想像力だ」と。大学ならば想像力に欠けることはないはずですが、強い危機意識をもって大学教育の改善に取り組んで頂きたいと思うのです。その際、お金と人が必要です。文部省は助けてくれるのか、というご質問がありました。もちろん答は明白であります。文部省としては必要な投資を惜しみません。しかし文部省の予算というのはもともとは国民の税金でありますから、やはりこの活動には税金を使うだけの価値があると誰もが思えるような活動を展開して頂きたい。センターのご発展を期待したいと思います。